

研究課題名：大規模化に伴う鳥害推移の解明
 予算区分：営農合理化〔地域総合〕
 研究期間：平 10～12 年度

担当研究室：農研センター 病虫部 鳥害研
 担当者：藤岡正博・山口恭弘
 協力・分担関係：

表1. 乾田直播田における鳥害による苗数減少（入水直前）

年	圃場数	枠数	苗数平均値		減少率 (%)	対応のある t 検定	
			枠内	枠外		t	P
1996	2	16	110.2	100.8	8.5	1.71	0.11
1997	1	12	180.3	176.3	2.2	0.35	0.74
1998	4	20	186.4	176.4	5.7	1.18	0.25
1999	4	28	75.8	80.1	-5.7	-0.62	0.54

減少率は防鳥枠内の苗数に対する枠外の苗数の百分率

表2. 有害駆除された鳥の回収数

年	キジバト	ドバト	スズメ	カラス*	合計
1995	3				3
1996	23				23
1997	29	5	4		38
1998	15	5		1	21
1999	3				3
2000**					0
合計	73	10	4	1	88

*ハシボソガラス。

**2000年には積極的な駆除は行われなかった。

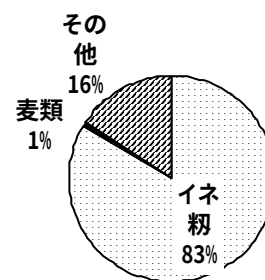


図1. キジバトの胃内容物

5年間に駆除後に回収された73羽を解剖し、食物のあった69羽の内容物の乾燥重量比。合計稲粒数は7,135粒、1個体平均140粒、最大992粒であった。

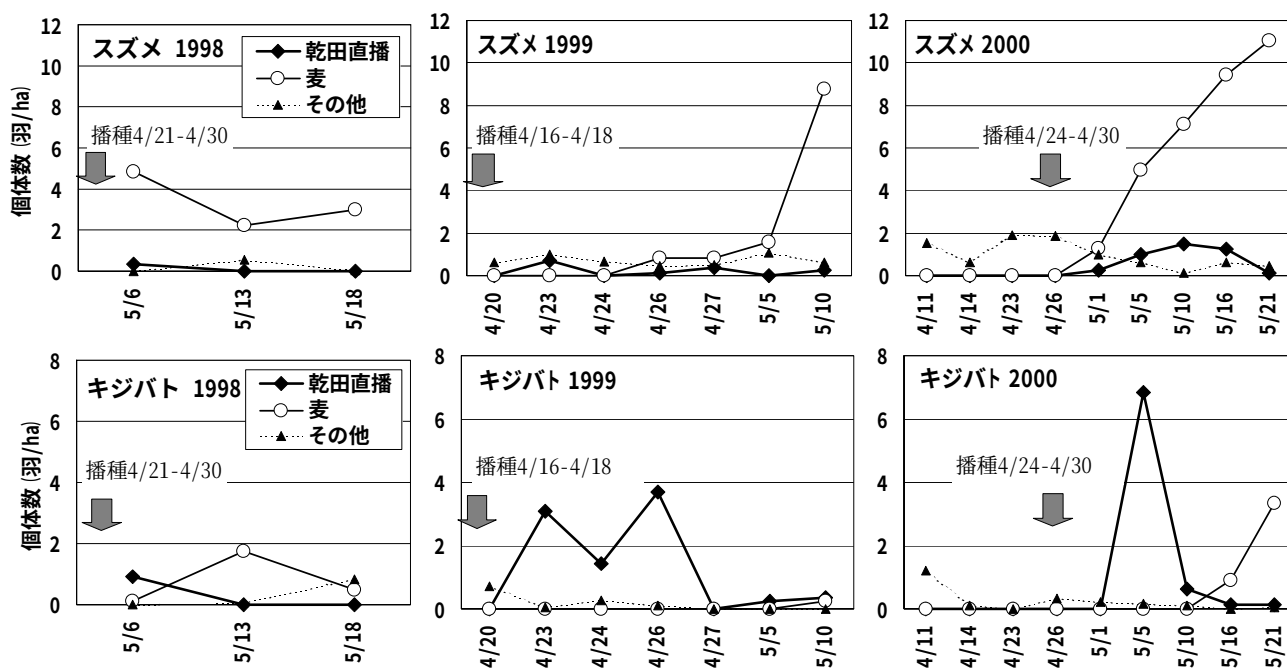


図2. スズメ（上段）とキジバト（下段）の飛来個体数の変化
採食中の個体のみについて環境別に個体数を示す。

4. 成果の活用面と留意点

本成果の内容は周囲に麦作のある状況での乾田直播には一般化できると考えられるが、スズメの稲への依存度が高い稲単作地帯には適用できない。

5. 残された問題とその対応

駆除は営農組合にとって負担になっているので、簡便で実効性のある忌避剤の開発が望まれる。これについては経常研究課題で実施中である。